大学コンソーシアム京都　第 30 回 FD・SD フォーラム
シンポジウム 2 「地域と大学―地域との共生における大学教職員の実践―」

「学修者本位の地域共生と「知の総和」答申後の地域連携」

共愛学園前橋国際大学　大森昭生

■地学一体の学び

共愛学園前橋国際大学は「地域の未来は私がつくる」というビジョンのもと、そう言える人材の素養として、「共愛12の力」を身につけるためのカリキュラムを展開してきました。そのコンセプトは、「Glocal」であり、「地学一体」です。

大学とは、地域と別物なのでしょうか？大学は地域の一部であり、一員であるはずです。また、人材を求めているのは地域であるので、地域の皆さんにも主体となって若者を育てましょうというメッセージとしても「地学一体」は機能します。地域という主体と大学という主体が一つになって若者を育てるのです。

■学修者本位の地域共生＝それを可能とするビジョンと DP

ところで、地域との共生はなぜ必要なのかに立ち返ると、私たちはどうしても「大学にとって」の地域共生をイメージしがちです。しかし、それは学生にとってはどうでもよいことだったりします。学生たちとの約束である、ビジョンや DP に即して地域共生が行われる必要があるのではないでしょうか？

大学本位の地域共生から学修者本位のそれへとの転換についても考えます。

■地域とつながるための教職員のマインド

そのうえで、地域とつながろうとするとき、私たち教職員はどんなマインドをもって地域と向き合えばよいのか、についても考えてみたいと思います。

■超少子化時代の地域連携＝大学連携 2.0：「知の総和」答申を踏まえて

一方で、激烈な少子化の進行は、その歩みを速めています。中教審大学分科会の特別部会ではいわゆる「知の総和」答申がまとめられました。超少子化時代の地域連携はどうあるべきなのでしょうか。大学コンソーシアム京都がこれまで培ってきた素晴らしい大学連携を土台に、「大学連携2．0」のフェーズを見据える時が来ているのかもしえません。そして、大学の協力から協働へと進んでいくとき、職員の役割がさらに増大してくるかもしれません。

答申の内容を踏まえながら、これからについても眺めてみたいと思います。

※当日はプレゼン資料を用いてお話しいたします。